

市長訓示

京都市では、文化を基軸とした都市経営を行ってきた。これまでも、文化を基軸に観光、平和、景観政策に取り組んできた。そして、来年はコンGRESS 2020が京都で開催される。現在もICOM京都大会が開催中である。あらゆる社会的課題の解決に向けて博物館がどういう役割を果たすのか、この機会にしっかりと考えてまいりたい。

今回、文化を基軸とした都市経営の重点方針にSDGs、レジリエントシティ、気候変動に関するパリ協定などを反映してくれている。改めて、これらを進めていただいている皆さんに敬意を表したい。

この京都に、あと2年余りで機能強化した新・文化庁が移転してくる。これも、今日までのいろいろな成果の積み重ねの結果である。文化を基軸とした都市経営が、経済的・社会的価値を生み出す。そして、あらゆる社会的課題を解決していく。この理念をしっかりと根底に据えて取り組んでいきたい。

そこで3点お願いしたい。

一つ目は、「未来社会を文化を基軸にデザインしていくこと」である。

2050年までに二酸化炭素排出量を「正味ゼロ」にする「1.5℃を目指す京都アピール」を宣言した。AI、5G、ビッグデータ、IoT、ロボットなどのイノベーションにより、地球環境の変化、人口減少、あらゆる社会的課題を見据えて先端技術を徹底的に活かしていく。

京都における「Society5.0」。そして、スタートアップ企業が京都に拠点を構え、先端技術のエコシステムが形成されつつある。このように、過去から積み重ねた人間中心の文化や自然との共生の視点を取り入れた取組ができるのは、京都ならではの評価されている。

少子高齢化、健康長寿、担い手不足、働き方改革など、本市が抱える政策課題について、文化を基軸とした視点により再点検し、解決の方策をしっかりと議論してもらいたい。

二つ目は、「暮らしの文化を大切にしたライフスタイルの改革」である。

食文化は、健康長寿、環境問題、観光の分散化、市場の活性化、伝統産業とのつながり、大学との連携、何よりも子どもの学び・育ちにつながっている。

京都には、衣食住や自然との共生、子どもの学び・育ちなど「暮らしの文化」が日常生活の中で生まれ、家庭や地域コミュニティにおいて大切に引き継がれてきた。

ぜひ職員の皆さんには、働き方改革を含めて、こうした暮らしの文化を大切にす
るライフスタイルを率先して進めていただきたい。

三つ目は、「機能強化した文化庁としっかり連携を図ること。そして、文化庁の
移転が、京都にとっても、日本全国にとってもよかったと思えるようにすること」
である。

I COM京都大会や観光と文化をテーマとした国際会議、コンGRESを含めて、
今後はこうした取組を京都だけで完結させるのではなく、国・文化庁と連携し、そ
して全国津々浦々につながり、京都から全国・世界へと波及効果が及ぶようにして
いかなければならない。

「京都コンGRES2020」。人間の尊厳を認め合う、犯罪を減らす、多様性を
認める。一見すると文化とは関係ないようだが、文化による物質的・精神的豊か
さが重要。文化が犯罪防止につながる。そういう文化行政に高めていかなければなら
ない。

「東アジア文化都市」。2年前の交流のレガシーとして、韓国・大邱広域市と文
化による交流を続けている。今年も多くの大学生がお互いの国を訪問し、交流して
いる。国と国との関係が厳しい中でも、文化芸術による国際交流が、世界平和に貢
献していることを実感している。

全庁一丸となってあらゆる政策を結び付けて、文化を基軸とした都市経営を深化
させ、そしてあらゆる社会的課題を解決していく。この取組をなお一層前進させて
いきたい。引き続き、よろしく願います。